

幼児の遊び(二)

牛 島 義 友

第二部 遊びの指導

前篇に於て述べた幼児の遊びの事實や、遊びについての理論的考察から、遊びの指導について若干考察を進めて見たいと思ふ。

一、遊びは生活への準備である。子供は何故遊ぶか、云ふあの面倒な論争に讀者を引込む積りはないが、子供の遊びの本質を知る爲にはグロースの準備説に一應傾聽する必要がある。スペンサーは遊びの成立原因として有り餘つた精力を擧げてゐる。生活に必要な力の力しか持たない者には遊び云ふ事はないが、精力の有り餘つた場合に生活と關係のない遊び事にそれを發散させるを説いてゐる。従つて遊びは實生活と關係のない無益の活動の様に考へられてゐた。之に對してグロースの準備説は遊びの持つ意義を一層正しく見てゐる様である。一見無意義な無駄な行動にしか見えない遊びも實は將來の生活への準備であり練習行爲であるを見て遊戯の重要性を説いて居る。此の二つの説は一見矛盾する様であるが、理論的に必らずしも矛盾するものではない。人は何故食事をするか云ふ問に對して、空腹になつたからだ云ふ原因的説明も、生活活動を續ける爲だ云ふ目的的説明があり得る様に、子供は何故遊ぶか云ふ問に對して、過剰精力云ふ原因を擧げる事も出来るし、又生活準備云ふ目的を擧げる事も出来、此の二つはいはゞ盾の兩面の様なものである。併し子供を教育する場合には此の表の面、即ち將來の生活に對する意義云ふ點から遊びを指導して行く必要がある。精

力過剰説を取る。遊びは安全瓣や暇つぶしで、結局遊び事なり教育の對象とはならない。さて然らば生活準備とは如何なる意味であらうか。人形を持つて飯事遊びをしてゐる幼女は將來主婦となる場合の準備をして居るのだと云はれる。併し此の考へは餘り行き過ぎて居る。此の調子で論ずるならば、自動車をいぢつて遊ぶ男兒は將來運転手になる準備をして居る事となり、親の持つ高い理想に反して困つた事になる。生活の準備と云ふのは、以上の様な意味ではなしに精神機能を練磨し、運動機能を練習して間接的に將來の活動に具へてゐるのである。子供が人形を持つて遊ぶのは子供が日常見聞して蓄積した身のまはりの知識を思ふ儘に活動させて楽しんでゐるのである。自動車を持つて遊ぶのは彼等の最も好きな自動車、表に出た時に第一に注意を引く自動車に就いての色々な觀念を自由に驅使し想像して楽しんでゐるのである。即ち是等の自由な遊びが結果に於て觀念や表象の練習となるのである。又三輪車に乗り廻したり獨樂を廻して遊ぶのは筋肉の發達と平衡力の練習と運動調節の稽古となつてゐるのである。斯る身心の機能の練習が遊戲の目的であつて遊びの内容が練習目的ではない。故に形式陶冶さでも云ふべきものである。

では子供は如何なる機能の練習をしてゐるかを見るに想像的活動に關したものが最も多い。之は玩具の種類を見ても又遊びの種類(第二表、第三表)を見ても首肯される事である。此の想像的機能は幼兒期の中でも三、四歳に特に多く、六歳になるに多少減少して之に代るに知的遊戲が増加する。即ち自分一個の想像を楽しむ状態から事物に向つて働きかけ、物を組立てたり、こしらへたり、(積木、手技)する現實的知識に向つて行く。現實から離れた單なる空想は何ら意味をなさないもので、現實に則した工夫、想像が文化を進めて行く。故に子供の遊びを指導する場合に此の方向に向つて行く必要がある。想像的遊戲は三、四歳の子供には充分意味のある生活準備ではあるが、五、六歳の子供は寧ろそれから脱却し、現實的知識に轉換さすべきで、知的遊戲を奨励すべきである。知的遊戲としては前稿第九頁にその種類を擧げ又知的遊戲

に關した玩具としては「拙稿幼兒の玩具」に具體的に掲げておいた。

運動機能に關した遊戯の必要なのは論を俟たない。

二、遊びは教育ではない。遊びが生活準備であるならば計畫的に準備、即ち指導する事が必要になつて来る。併し此の場合の指導には餘程の注意が必要になつて来る。かう云ふ遊びが適當であるこの理論に基づいて一々子供に手を取つて教へ、かうしなさい、あゝしなさいと一々指圖したのでは駄目である。それは教育であつても遊びではない。第一子供が承知しない。こんな六づかしい遊びに對しては「もう止めた」と云つて逃げ出すであらう。遊びはあくまで遊びであり、自由な自發的な生活表現である。故に知的指導の態度で遊びを指導すべきではない。此の意味で遊びは教育ではない。然らば如何にして遊びを指導するか、此の間に對し二つの答が得られる。第一は子供と共に遊ぶ事である。先生、或ひは母親としてとなく遊び相手として子供と共に遊ぶ事によつて子供を適當の遊びに導く事が出来る。子供は大人が自分と一緒に遊んでくれる事を何よりも望んでゐる。故に此の方法は最も容易な指導法である。フレーベルはかくして子供を指導した。子供と對立しては命令する事は出来ても指導する事は出来ない。内心よりの服従がなくては指導は出来ない。此の服従は自分と共に遊び、共に考へてくれる人へのみ向けられる。

第二には適當な遊びの環境を作る事である。子供と共に遊ぶ餘裕のない親でも、適當な環境を作る事によつて間接に遊びを指導する事が出来る。此の爲には適當な玩具とよい遊び友達を選定する事が必要である。玩具に就いては既に述べたが遊び相手については後で觸れる事にする。

三、大人の遊びと子供の遊び。大人の遊びも子供の遊びも一口に遊びと云つてゐる。併し兩者は本質的に相異なるものである。多くの研究者も此の事を明示してゐるが尙論じ足りない點があるから詳しくのべる。

大人の遊びは仕事との關係に於てのみ考へられる。仕事をしない状態、それが消極的休養であるにしろ、積極的氣分轉換であるにしろ、義務的の仕事の場面から解放された時に遊びの生活が始まる。大人の世界では遊びが同時に仕事になる事はない。職業スポーツも觀衆にまつては娛樂であるが、選手自身にまつては眞劍な生活闘争であり、その勝敗が直ちに彼等の生活問題となつて来る。彼等はその運動からはなれた時にのみ遊び氣分になれるのである。

大人にまつて、遊びとは仕事の中に粹付けられた世界である。仕事の世界は眞劍な現實的な眞實の世界であるが、遊びの世界はそれらの世界から隔絶した治外法權的な世界である。そこでは人爲的の約束の範圍内で行動する假想的の非現實的のさうでもよい世界である。一定のルールの許にプレイをする世界である。仕事の世界では一定の業積を上げる事、勝利を占める事が最も重要な事であるが、遊びの世界では一定の約束の下に行動する事が要求される。即ちルールを侵さないフェア、プレイが要求される。然しかゝる約束といふものは眞劍な仕事の場面に於ては無意義なものである。例へば戦争の場合にはあらゆる約束が無視され、そこでは勝つ事のみが要求される。ゲームでは負けても恥ではないが、戦争に敗北する事は最大の恥辱であり、國家の滅亡となる。

此の様に大人の世界に於ては仕事と遊びとが嚴然と區別されてゐる。

之に對し幼児には仕事のものがまだ存在してゐない。仕事は小學校に入り色々の勉強を強ひられる様になつてはじめて發生する。それ以外の仕事とはせいふく子守りとか、お使ひ位である。併し是等のもでもまだ仕事の意識を持たぬのが普通である。従つて彼等には大人の意味に於ける遊びと云ふものは存しない。彼等の遊びは大人の場合のやうな生活の消極的場面ではなく、遊びが彼等の全生活である。そこに於ては未だ遊びと仕事とが分化されてゐない未分化の状態にある。彼等にまつては遊びが同時に仕事であり、仕事は遊び乍らなされる。否、かゝる遊びと仕事とが概念を用ひる

事が既に適當でない。かゝる性格を持つた子供の遊びから、彼等の獨特の遊び方いふものが生じて来る。

例へば彼等は遊んでゐる中によく喧嘩になる事がある。喧嘩は遊ぶ事ではなく眞剣な争ひである。即ち仕事の性格を帯びた事件である。大人がゲームをして喧嘩したら仲間から弾劾されてしまふ。大人の遊戯には喧嘩はない。喧嘩は遊戯が仕事の性質を帯びた時にのみ發生する。例へば賭博の如く勝敗が同時に損得になる場合によく喧嘩になる。或ひは對校競技の如く學生といふ特殊な生活を營み、比較的に仕事の意識の薄弱な子供の世界と大人の世界との中間的存在である青年のスポーツの場合にのみ競技が喧嘩になる事がある。然るに子供は始終喧嘩をする。それは彼等の遊びが仕事の性格を反面に有してゐる爲である。或ひは泣くさいふ現象も同様である。子供はよく泣く。子供は泣き蟲だといふ。泣くのは彼等の本能的性質であるを考へられる。併し之は單に本能のみではなく彼等の生活形式がさうさせるのである。遊びといふ楽しみの中に、何故泣くさいふ悲しい事が起らねばならないのか、それは彼等が遊びを楽しみとして娛樂として味はつてゐるのではなく、遊びが彼等にまつては眞剣な生活である故に、思ふ様にならない時には泣くさいふ深刻な表現をなすのである。吾々の遊戯觀察の場合にも屢々子供は泣いてゐる。

以上の子供の遊びの特異性から遊戯指導の原理が發見される。但し今度は子供を大人にするのではなく、子供の世界を一層充實さす事を考へねばならぬ。前述の大人の生活、仕事と娛樂とが分離した状態は決して好ましいものではない。此の状態こそ近代生活の悩みである。過去に於ては仕事と遊びとが左程分離してゐなかつた。興味が湧けば損得を度外視して仕事に専心するが、氣に入らねば仕事をしない職人氣質、彼等はたしかに仕事を楽しんでゐた。今日に於ても藝術家、學者、或ひは眞の實業家は仕事そのものを楽しんでゐる。専心研究に没頭しても苦痛を感じず、遊びと同じ樂しみを持ち得る生活こそ人間生活の理想ではなからうか。

又此の點から考へるに婦人の家庭生活に對しても新しい光が投ぜられて來る。家庭婦人は實に忙がしい。十六時間勞働さふべき勞働強化が何所の家庭にも行はれてゐる。それにも拘らず勞働爭議もなく、過勞の弊害も起らないのは此の勞働が實は勞働ではなく、樂しき仕事、此の意味で遊び事であるからである。他から強ひられる事なく、自から愛する夫や子供の爲に盡す事は妻として母として最大の樂しみであらう。此の遊びと仕事との融合した生活たる家庭生活は決して束縛された奴隸生活ではなく、人類文化の温床である。此處に於て最高の創作たる人格創造としての教育がなされてゐる。而も之に主として携はるものは母親である。

斯かる仕事則遊びの状態こそ亦子供の生活である。故に吾々は子供の遊びを大人の遊びに變へるのではなく、子供の遊びを充實させ完成させる事に向はねばならない。此の爲には仕事の意識の發生を防ぐ必要がある。此の場合の仕事とは義務的の仕事の意味である。斯かる義務的仕事感に學校教育を關係して發生する。即ち子供の能力以上の負擔が課せられた場合に勉強は厭な仕事となつて來る。優等生には勉強は樂しみで心の遊びであるが、劣等生には苦しい仕事となる。斯る仕事感を抱かせずに教育する事が何よりも望ましい。此の點で自由主義的教育は正しい道を歩んでゐる。故に遊びを通して教育する事は最も効果のある事となる。

又學業以外の仕事を遊びに取り入れる事が好ましい。家の仕事、學校の掃除等を子供は喜んで、即ち遊び的意識を以て行ふ。此の意味で適當に指導された勞作教育は子供に社會生活を教へる最良の方法である。

四、道德感の指導。 子供は眞劍に遊んでゐる。故に對手の不正に對しては怒り、不當の處置に對しては反抗する。子供と一緒に遊ぶ大人はさかく大人の遊びの積りで振舞ふ。大人に取つては遊びとは如何でもよい事であり、少し位のするさは却つて無邪氣なユーモアを引起す。併し子供も遊ぶ時には此のいたづらは避けねばならない。大人に取つては如何でもよい事でも子供にとつては眞劍な權利侵害を感じられる。

又子供の争ひに對する態度も同様でなければならぬ。彼等にまつてはそれ／＼深刻な理由があつて争つてゐるのであるから、その重要性を買つてやり、軽々しく無視してはならない。斯かる審判者に對しては子供は信頼を持たなくなる。

五、ゲームの指導。幼兒は殆んどゲームをしない。其遊戲種目を通覽しても、大部分は一人で遊ぶ遊びであり、數人一緒に遊んでも各自勝手な遊びをしてゐる。砂場に於ては如何に各人が忙しそうに色々なものを作つたり壊したりしてゐる事であらうか、其割に共同の製作はなく、寧ろ利害衝突でいさかひが起る事が多い。併し社會的訓練は共同的遊戲、特にゲームに於てなされるから、此爲に特別の指導が必要である。

幼兒がゲームをしないのは、彼等の智的能力が、そこまで發達してない爲である。ゲームには多く複雑な規則がある。野球の規則等は一々數へ上げたたら大人でさへ一二日では憶え切れない。斯る複雑な規則を理解し、充分使ひこなし、一々の場面に應じて適當に處理し得て初めてゲームの面白さが味はへる。斯るゲームによつて規律、共同等の社會性、道徳性が涵養される。處が幼兒には未だ斯る複雑な規則を理解する能力がなく、年長の友に仲間入させてもらつても、味噲糟として尻に付いて行くだけである。故に幼兒に對しては簡単な規則からなるゲームを教へる必要がある。然しゲームには多くの問題がある。即ちゲームには勝負が伴ふ、而も子供は勝つ事に重要な意味を感じる。遊びに勝つ事は生活に勝つ事である。遊びは主として身體的運動機能に關係する。故に體の丈夫な子供は常に勝ち、生活勝利者としての優越感を感じる。此自誇が第一に問題である。併しそれよりも負けた子供の劣弱感の方が更に深刻である。體の弱い者は常に負けねばならない。此積り積つた敗北の結果子供はいぢけてしまひ、自信を失ひ、社會生活が出来なくなる。少數の勝氣な子供は此敗北に發憤し、智能的方面で取りかへさんご努力するかもしれない、併し多くの者は小兒期の劣弱感に一生惱まされる。故に勝負事には特別に注意して指導しなければならぬ。常に負ける事がない様に、一つの世界で敗けても他の世界では勝ち得る事を教へ、自信を失はずに努力出来る様に指導しなければならぬ。

六、遊び相手としての母親。最後に遊び相手の問題に一言しやう。子供は一時間に平均二人の遊び相手が必要として居る事が前研究で明かになつたが、斯る多数の者が常に子供の相手になつて居なければならぬ事は困つた事で、或學者は子供を出来るだけ一人で遊ぶ様にさせねばならない、子供が大きくなれば一人で過さねばならぬ時間が多くなるが、斯る場合一人で楽しむ方法(讀書、蒐集)を知つて居らないと困る議論して居る。此點は異論はあるが、兎に角子供は多くの相手を要し、其相手に影響されて、性格が形成されて來る事實は認めねばならない。故により遊び相手が問題となる。

遊び相手として最初に現はれて來るものは母親である。故に母の問題から始める。母に向ひ、子供を愛せよと云ふのは無意味である。私は「子供を溺愛するな」と警告したい。小兒は保護を要求し、親は凡ゆる身の邊りの世話をしてやらねばならない。然し此態度を何時までも續けてはならない。子供は活動へ自由を要求する。自分で自分の事を處理する事を求める。此成長する者の當然の要求を、親は善惡に蹂躪する事が多い。何時までも一人で着物が着られず、顔を洗へない子供は母の責任である。度はずれたホーム、シックを起す青年は親の溺愛に因る。子供を溺愛する母は多く其結婚生活に缺陷が在ると云はれて居る。夫に充分の愛と満足を感じない妻は其子に愛を振り替へる。其結果夫婦生活を一更不幸にし、然も愛する子供が、溺愛の爲にスポイルされ、歪められた性格の者になつて苦しむ場合が非常に多い。

母は高い立場から子供を愛しななければならない。此爲には子供が満三、四歳にもなれば新しい遊び相手、即同じ年頃の友達を與へねばならない。子供同志相互の交渉によつて始めて健全な性格の發展が見られる。

母親に對する警告に代り、父親に對しては「子供と遊ぶべ」と警告しなければならぬ。吾々の調査によれば父親が子供の遊び相手となる事が餘りに少い。自分と遊んでくれない人に對してさうして愛し、信頼する事が出來よう。子供は親を慕ふものだに定めるのは迷信である。如何に、親を憎み、他人は信じても親には從はない青年が多い事であらうか、之は子供と遊ばない親の報いである。